

にした。

8. 平成2年度の予算案・事業計画案および平成元年度の事業報告案について

庶務担当中村理事および会計担当の村松理事から資料に基づいて説明があった。今後継続的に審議を続けて行くことになった。

(p.60からつづく)

(サウンダー使用)：各チャンネルの輝度データ温度を使用して算出する。

持ち上げインデックス(サウンダー使用)：500mbの気温等と比較して安定度のインデックス(Lifted Index)を計算する。

層厚(サウンダー使用)：数値予報モデル出力の高度データと(衛星による)鉛直温度プロフィールで計算する。

温度風プロフィール[傾度風](サウンダー使用)：層厚の計算値から1°格子、地表～100mbまでの傾度風を算出する。

マン・マシン法による水蒸気解析(イメージャ/サウンダー使用)：可視/赤外の雲パターン解析をベースにして、海上に水蒸気プロフィールをあてはめる。水蒸気プロフィールは13種類で、6レベル、2.5°格子の値が1日4回出力され、数値予報への入力データとなる(筆者現在も行われている)。

降水量推定(イメージャ使用)：現業的な手法(Scofield-Oliver法)で算出し、洪水予報に利用する。出力図はAFOSシステムにも流される。

4. 海面パラメータ

五大湖の水解析(イメージャ/NOAA衛星のAVHRR

使用)：海軍と海洋大気庁の合同海水センターで、12～4月の週3回(月、水、金)実施。内容は、氷の領域、密接度、厚さ、水路。画像データに加え、カナダの飛行機観測や地上観測を使用する。結果はテレファクスで通知され、氷域予報、沿岸警備、船舶、調査に利用される。

5. データベース

保存データ：画像、サウンダーデータ、キャリブレーションデータ等を保存する。

6. 衛星風

雲移動風(イメージャの11.2μm使用)：現行のGMSの風計算の方法とほぼ同一と思われる。

水蒸気風(イメージャの6.7μm使用)：アルゴリズムは雲移動風と同じだが、1時間間隔の画像を使用する。風ベクトルデータへの高度値設定方法は現在研究中。

DLM風(イメージャ/サウンダー使用)：DLM(Deep Layer Mean)風は熱帯低気圧の指向流として有効である。上記の衛星風データ、サウンダーの傾度風、およびゾンデ等の高層風データを用いて計算される。

編集後記：編集委員となり、そろそろ1年が経とうとしています。「シンポジウム」を担当していますが、執筆依頼に不手際があったり、関係される諸氏にはご迷惑をおかけしました。この場でお詫びを申し上げます。

毎月1回、気象庁内の会議室で「天気」の編集会議が開かれます。会議に出席すると、「天気」をよりよいものにするために、いかに各編集委員が真剣に考えているかわかります。

よく、岸保先生の「数値予報新講」が例として出され

るのですが、「内容」も充実させ、しかも読者に広く興味をもってもらう本にするためにはどうすればよいか、自分自身では「天気」はその目標を満足しているのではないかと思うのですが、そういった意見はあまり聞かれません。

掲載論文の内容から印刷方法、体裁まで、会議ではなごやかな中にも、ある緊張感を保ちながら討論が続けられます。

(禎)